

2025年9月7日

西村隆星

主題「狭い門から入りなさい」

ルカの福音書 13:22-30

序

聖書を読んでいくと、また教会に来てると必ず生まれる一つの問い。それは、誰が救われて、誰が救われないのかということ。今日の箇所は、ある人が「主よ、救われる人は少ないのですか」。この問いから始まる。当時のイスラエルの民は、イスラエルの民なら基本的には、すべて救われると、考えられていた。ミシュナーと言われる当時の本には「すべてのイスラエル人は来たるべき世界に分け前を持つ」、つまりイスラエルの人たちは救われるんだ、と書かれています。しかしここでイエスに質問した「ある人」は、そこに疑問を持ったのだと思います。だからこそイエスに「聞いた」。イエスを試そうとしたのではなく、本当に救いについて教えてほしいと願っていた。真理とは何か。またこのイエスが言っていることは真実なのか、それを知りたい、と思って来た。私は救われるのか、神の国に入ることはできるのか。私はその食卓に、その交わりに加えられるのか。そんな思いがあったのかもしれない。いずれにせよ、「ある人」はイエスに人生における最も重要な問いを投げかけた。何を持って救われるのか。そんな問い。その問いに対してイエスは二つのたとえと一つの教えをもって答えられた。一つ目のたとえが 24 節。

1. 狭い門から入りなさい。

狭い門から入るように努めなさい。あなたがたに言いますが、多くの人が、入ろうとしても入れなくなるからです。

ここでイエスは二つのたとえを語られる。一つ目は、門のたとえ。二つ目は、家の主人のたとえ。一つ目のたとえは、「狭い門から入るように」というもの。「狭い門」。ここで急に「狭い門」と出てきてなんのことだろうか、と思うかもしれない。マタイの福音書 7:13-14 ではこのようにあります。

狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広く、そこから入って行く者が多いのです。いのちに至る門はなんと狭く、その道もなんと細いことでしょう。そして、それを見出す者はわずかです。

ここで語られていること、それは狭い門は「いのちに至る門」へと繋がり、反対に広い門は「滅びに至る門」へと繋がっていること。それでは具体的に「狭い門」とは何か。

それは、イエスのこと。イエスの語る神の国の福音。イエスはこの「狭い門に入るように努めなさい」といいます。この「努めなさい」は努力する、とか奮闘するとか、苦闘する、といった意味をもつ言葉です。え！？救いは、努力や鍛錬によって得られるものではない、と今まで聞いていたのに、話と違うじゃないか！そう思うかもしれませんが。そうなんです、ここを「自分の力」や「自分の努力」によって、と考えてしまうとイエスの語りたこととはズレてしまいます。

ここで言われていること。それは、「真実な悔い改めをしなさい」ということ。そうでなければ、「多くの人が、入ろうとしても入れなくなる」時が来るから。そして二つ目のたとえもこれと関連しててきます。25 節。

家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまってから、あなたがたが外に立って戸をたたき始め、『ご主人様、開けてください』と言っても、主人は、『おまえたちがどこの者か、私は知らない』と答えるでしょう。

二つ目のたとえは、「家の主人が戸を閉めてしまっからは、入れない」というもの。ここでもポイントは、家の主人が、家の空いていた「戸を閉めるときがくる」ということ。そして一度閉まれば、どんなに外から戸を叩いたとしても、「ご主人様、開けてください」と言ったとしても、家の主人は「おまえたちがどこの者か、私は知らない」と答える。とてもシンプルなたとえ。ここで言われる「家の主人」はイエスのこと。家の主人であるイエスがいつか開いていた戸を閉める時がくる。そうなれば、どんなに戸を叩いたとしても、ことばをかけたとしても、「おまえたちがどこの者か、私は知らない」と言われる。さらには、26 節にあるように「すると、あなたがたはこう言い始めるでしょう。『私たちは、あなたの前で食べたり飲んだりいたしました。また、あなたは私たちの大通りでお教えてくださいました。』」と言ったとしても、同じように「しかし、主人はあなたがたに言います。『おまえたちがどこの者か、私は知らない。不義を行う者たち、みな私から離れて行け。』」と突き放されてしまうのです。

どんなにあなたのこと知っている、と、食事をしたじゃないか、交わりがあったじゃないか、あなたのことば聞いたじゃないか、と言ったとしても、「真実な悔い改め」がなければ、表面上のことだけでは、神の国に入ることはできないんです。私はイエスを知ってる！といくら言ったとしても、「真実な悔い改め」がなければ罪の問題は未解決です。それゆえにイエスはその人たちを「不義を行う者たち」とされてます。罪ゆえにイエスは「おまえたちがどこの者か、私は知らない。不義を行う者たち、みな私から離れて行け」と言われるのです。

【図解】しかし、「真実な悔い改め」って一体何だろうか？自分は本当に「真実な悔い改め」に導かれているだろうか？ともしかしたら不安になってしまう方もいるかもしれません。今回も少し図を用意してきましたので、ご覧ください。子どもたちも分かるかもしれないのでちょっと見てみてください。

真実な悔い改めは何か、と考えていくと、最初に重要なのは、「自分が罪人」であると気づくことです。それはタイミングはそれぞれですが、聖書を通して、自分の弱さを通して、自分が罪人であること、どうしようもない者だと思ひ知る。そのとき、矢印が進んで、自分には、自分以外から救いが必要なんだと気づくんです。そのときに二つの道があります。それが、今日の本題。広い、滅びに至る門か、狭い門か。狭い門は、イエスさまのこと。では、滅びに至る門は、何か。それは、イエスさま以外のものと言えます。でもそれだとなんだかずるい言い方な気がするので、もう少し噛み砕くと、変わってしまうもの、と言えます。私たちの生きる世の中で、自分のアイデンティティ、自分はこうだから自分なんだ、とするものはたくさんあります。例えば、仕事ができること、成功すること、頼られること。お金をたくさん持っていること、良い行いをする事、人に愛されること、友人がたくさんいること、何かすごい能力を持っていること、などなど。ここに自分の弱さや自分のどうしようもなさによってできた穴を埋めようとして、一生懸命押し込めるわけです。自分は大丈夫だ、自分は強いんだ、と。自分の罪に背を向けて、見て見ないふりをするわけです。しかし、それは滅びに至る門。なぜなら、仕事でそのときは成功したとしても、一瞬でその地位がなくなることがあるし、お金も何かの拍子で取り去られる時がある。人間関係もうまくいっているとっていた矢先に、裏切られることがある。どれだけ良い、とされることをしたとしてもその評価は人によって変わってしまう。変わってしまうものに本当の信頼ってできないんです。そう考えるとそんな変わってしまうところに救いなんてないんです。

でも、一つだけ、唯一変わらないものがある。それは狭き門であるイエス・キリストです。私たちは狭き門であるイエスを求めるとき、私にはイエスさまが必要です、あなたと出会いたいって心から願う時、今まで自分に向いていた心が、自分さえ良ければいいと思っていた自分から、イエスに向かっていく心へと変えられていく。その時、私たちはイエスと出会うことができる。そしてイエスと私が出会う時、イエスがかかってくださった十字架の意味を知る。復活の意味を知る。私のこの汚くて、醜い罪を身代わりに背負って死んでくれたこと。そして、背負ってただけじゃなくて、イエスと一緒に生きる、新しいいのちの中を生きるようにと、復活してくださったことを知る。このことを自分のこととして信じて、このいのちの中を、この神の愛の中を生きていくようになる。これが真実な悔い改めであり、救いを受け取る、ということです。そしてこのように狭き門から入ることを努めなさい、心から

求めなさい、と言われている。続けてイエスはたとえに続けて教えを語られます。28 節。

2. 後にいる者が先になり、先にいる者が後になる

あなたがたは、アブラハムやイサクやヤコブ、またすべての預言者たちが神の国に入っているのに、自分たちは外に放り出されているのを知って、そこで泣いて歯ざしりするのです。

ここで言われていることは、「アブラハムやイサクやヤコブ」たちの先祖たち、そして「すべての預言者たち」、神のことばを語ってきた預言者たちが「神の国に入っている」ように、イスラエルの民は自分たちも神の国に、救いに入れられていると思っていた。はじめに見たミシュナー「すべてのイスラエル人は来たるべき世界に分け前を持つ」と言われているような考え。しかしイエスは、それは違うのだ、と言われる。血筋によっては救われない。そしてここで注目したいことは、「すべての預言者たち」についてイエスが語っていることです。歴史を紐解けば、一部のイスラエルの人たちは神のことばを預かり、語る預言者たちを迫害した。自分たちの都合に合わなければそのことばを、預言者たちを退けた。つまり、神のことばを退ける者は、聞かない者は、たとえ正当な血筋であるイスラエルの民であっても、神の国の外に締め出されるということ。たとえ、高い地位にあったとして、一生懸命、代々伝わる口伝律法を忠実に守っていたとしても、神の前で、心から悔い改め、御言葉を聞き、イエスを救い主としてお迎えしないのであれば、「自分たちは外に放り出され」「そこで泣いて歯ざしりする」のです。

「東からも西からも、また南からも北からも来」る者、それは異邦人です。イスラエルの民ではない、異邦の民。神の民だと思っていた自分たちは外に投げ出されているのに、罪人だと蔑んだ者たちが神の国の食卓に着く。それゆえに、イエスは言われます。30 節。

いいですか、後にいる者が先になり、先にいる者が後になるのです。」

後にいた「異邦人」が、救われて神の民となる。先にいた「イスラエルの民」が「神の国の外に放り出される」、滅びてしまう。しかし、ここで勘違いしてはいけないのは、すべてのイスラエルの民が滅びて、すべての異邦人が救われるのではない、ということ。聖書を見ても、一部のイスラエルの民はイエスを信じ、悔い改めた。

結論 真実な悔い改め

ですからここで最初の問いに戻ります。それは、「主よ、救われる人は少ないのですか」。

救われる人。それは、「真実な悔い改め」に至り、イエスを信じる者。それは、「狭き門から入るように努める者」であり、「開かれている戸からイエスという主人がいる家に入ること。」しかし、この神の国の門は、戸はいつまでも開いているわけではないんです。家の主人であるイエス・キリストがその門を、その戸を閉じる時がくる。だからこそ、今一度自分自身を省みる必要があります。私は、イエスを求めているだろうか、私の罪の問題に解決を与えてくださるのは、私の主イエスだけだ、と本当に分かっているだろうかと聞わりたい。

そして、「真実な悔い改め」を通して、私たちは神の愛の中に生きるものとされます。では神の愛の中に生きるようになれば、もう苦しむことはないのか、というとそんなことはないです。イエスのゆえに苦しむことがたくさんあります。この世との戦いも、古い自分との戦いもある。

イエスご自身も戦われたんです。ゲツセマネの園で祈られた時、苦しきもたえながらも「父よ、みこころなら、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの願いではなく、みこころがなりますように」。そう祈りながら、22章の44節で「**イエスは苦しきもたえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた**」とある。この「苦しきもたえて」と24節の「努める」は同じ語源のことば。そのことばの通りにイエスは十字架へと向かわれた。そしてその歩みは本日の箇所もそうです。22節で、イエスはエルサレムへの旅を続けておられた、とある。イエスの向かう目的地。それは十字架の待つエルサレム。しかし、その道中もイエスは町や村を巡り、神の国の福音を伝え続けられた。自分を死へと追いやる十字架が待ち構えることを知りながら、私たちの罪を代わりに背負い、十字架にかかるため、その苦しみの道を自らの足で進まれた。それは私たちが救われて、永遠に生きるものとされることを誰よりも願い、求めておられたから。狭い門から入ってほしい、あなたと共に神の国で食卓に着きたい、と願っておられるから。そのために、エルサレムへと向かわれた。

私たちは問われている。私はどの門に向かっているか、と。イエスを求め、イエスという門を通してでなければ、救いはないのだ、と信じているだろうか。宗教は結局同じことを語っているんですよ、とよく耳にします。色んな教えがあるけれど、結局同じところに道は通じているから、どれを信じるも自由ですよ、大丈夫ですよ、と。一見、寛容で気持ちのいい言葉です。しかし、聖書は明らかにそうは言ってない。どれだっていい、何だっていい、みんな救われるよ、そうやって言えたらどれだけ楽でしょうか。しかし、広い門から入る人が多くて、それは滅びに至る門なのだとと言われるのです。それは人には罪があるからです。イエスという狭き門。神がご自分のひとり子をお与えになって与えてくださったこの門。

ここから入りなさいと、招いてくださっているこの門。私たちはここに真理を見出し、確信を持って共に歩いていきましょう。最後にみことばをお読みします。ヨハネの福音書 14 章 6 節。

イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。

【図解】

